

太平洋戦争と北米伝道 ④ 抑留所での活動

おやさと研究所研究員
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前号では、日米開戦と同時に敵性外国人としての逮捕、抑留された教会長や布教師たちに関して、その多くが拘留された3つの抑留所での生活について述べた。今回はさらに、天理教教団としての活動や個人としての行動などについてみていく。

抑留所での活動

抑留所で発行された『ローズバーク時報』や『サンタフェ時報』などの新聞記事を見ると、仏教、神道、日系キリスト教などの各教団は、所内に広く呼びかけ定期的な活動を行っている様子が見られる。また金光教桑港教会の福田美亮のように日本の国粋派として活動している宗教家もいた。一方、天理教は特に教外者に対して積極的な活動は行っていない。これは橋本正治2代アメリカ伝道庁長の姿勢によくあらわれている。自叙伝『章魚』で、ビスマルク抑留所での様子を「逮捕以来私は宗教家として、収容所内の一切の政治的関係に触れず、静かに教祖の足跡をしのいで、何とかその内的生活を意義あらしめようと考へてみたので、表面に出るのをつつしむと共に、教会長達にもその態度を取らせていたのである」(129頁)と述べている。またローズバーク抑留所では「柵内では当局のスパイ網が完全に敷かれてをり、一言一行細大もらさず、その日へ当局の記録にとられ……例えば、昨夜誰かの講演があったとする。翌朝はその内容がすっかり当局に分つてゐるのである」(147頁)と記しており、積極的な活動を慎まざるをえなかった状況がうかがわれる。

しかし天理教関係者内では、橋本庁長を中心に月々の祭典が執行されており、布教師や信者などが定期的に集まっていた。また天理教の教理勉強会などもしばしば開催されていた。たとえば、サンタフェ抑留所での様子は、布野光蔵3代ワシントン教会長の手記には「35名の教友毎月26日集合。会館に図書室に洗濯場の片角に、食堂にと集合」、「昭和19年の正月元旦祭も氷零下15度の洗濯場で深い雪中を掃して参列ベンチにかけて遥拝した。御馳走は2、3種のキャンデーにオレヂ・ブトウ位らしいものでしめやかに行ふ。」などと記されている。また、いつ終わるかもわからぬ長い抑留生活の中で、一同が精神的に困窮していた様子などもうかがわれる。橋本庁長は抑留中の記録である『軟禁六年』に、1945年7月の祭典執行後に雑談をした時の様子を「毎回Beerの泡の抜けし様な会合なり。何等道を求むる心皆に無し。どうなりと成れの投げやり気分。」(64頁)と評している。

個々の信仰の実践

こうした苛酷な環境で抑留生活を送っていた布教師たちであったが、他者を喜ばせたり、他者に献身したりするなどの信仰実践を行っていたものもいた。抑留所での橋本庁長の様子は次のように伝えられている。

橋本庁長はどんな苦境の中でも周囲を喜ばせるということに終始して、鉄条網の中でも天理教信仰者としての真価を発揮されたと聞かせていただいています。また、先生はなんの楽しみもない収容所の中の人々に『宮本武蔵』や『大菩薩峠』を大声を張り上げ、登場人物の姿勢、声色を実に巧みに操って聞かせ、何百人もの人々の慰安につとめられたことも聞かせていただいています。(武本、2001:10)

ハワイで逮捕された後、アメリカ本土に送られて抑留所に拘留された瀬戸直一2代オアフ教会長は、抑留中も日米開戦前と

同様に人のためにつくすことを心がけ、「ハワイ、ホノウリウリ抑留所では、マラリアにかかった日本海軍軍人の看護をする。サンフランシスコ郊外のシャープパーク監禁所では、抑留者の代表で餅つきの交渉に行く。サンタフェ抑留所では、作業時間外でないと所内の理髪屋に來れない抑留者のために、時間外に散髪をしてあげる。」(山倉、1999:48)など、自分の信条に基づき行動していた。

また長期にわたる抑留という厳しい生活環境を通じて、信仰的な悟りの境地にいたった様子も多く見られる。布野光蔵は抑留中の様子を書き留めた手記に「無心の中に教祖を頂き、親を迎へる佳仙の境地は尊い。大節の中にとけこみ、心身の自由を失ふた時に神の自由を心にはじめて頂く。」と記し、福島はま2代ターミナル教会長は、教祖のご苦勞に思いをはせ、「ああ。これは、教祖が奈良の監獄所で御苦勞下さったひながたと同じやと思うてね。」と述懐している。

橋本正治2代アメリカ伝道庁長

抑留された布教師たちは、橋本庁長を中心として抑留中もアメリカ伝道庁の借金返済をつづけていた。1934年に北米伝道を統括する機関としてロサンゼルスにアメリカ伝道庁が設立されたが、その土地購入と建築費用は膨大なもので、多額の負債が残っていた。1939年に2代庁長として着任した橋本は、伝道庁で緊縮財政を行い、管内の教信者の協力を仰ぎながら借金の返済につとめていた。抑留所内でも、菜園での労働、屋根の修理、煙突掃除などで得た収入をそれぞれが出し合って、毎月債権者に送り続けた。またサンタフェ抑留所でハワイからの布教師たちと合流した際には、当時ハワイでは抑留者に30ドルの小遣いの送金ができたため、ハワイの布教師たちの中にはそれをアメリカ伝道庁の借財返済にあてるものもいたのである。こうしてこの借財は抑留期間中にすべての返済をみている。

こうしてみると、天理教布教師たちの抑留生活において、橋本庁長の存在は非常に大きいものであったと言える。庁長としての使命を忘れず、生活を共にした教会長や布教師たちを指導し、自らの信仰を伝えながら、天理教教師としての歩みを示していった。終戦後ハワイに帰還する教会長たちに対して、ハワイの天理教の今後についての明確な指示を出し、東部への転住を決意した者たちへは、新天地行に向けて種々助言している。また共に抑留された布教師たちに対してだけでなく、西海岸の居住地から強制的に排除され、収容所で生活する信者たちとも手紙のやりとりを頻繁に行っていた。

橋本庁長は非常に筆まめな人物であったようで、日記をつけることはもとより非常に多くの著作もある。抑留中も日々の食事メニューの記録を含んだ大変詳細な日記を残しており、『抑留六年』として書物になっている。さらに自叙伝『章魚』における抑留体験に関する記述や、抑留中に詠んだ歌をまとめた『自選歌集 軟禁抄』などもあり、これらは天理教の教会長や布教師たちの抑留体験にとどまらず、日本人抑留の記録や日系アメリカ人移民史の史料としても貴重である。

[参考文献]

武本照雄「アメリカ伝道の初期に道についての人々(4)」『天理教海外部報』第442号:10~11頁、2001年12月26日。

橋本正治『章魚』第二巻、1955年。

橋本正治『軟禁六年』下巻、1955年。

山倉明弘「天理教布教師瀬戸直一の語る戦時抑留体験」『天理インターカルチャー研究所 研究論叢』第8号(4):21~71頁、1999年。